

2016年度
関西学院大学ロースクール
B日程

一般入試（法学未修者）
特別入試

論文問題

《10:00～12:00》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論文問題】

問題文をよく読んで、以下の各問題に答えなさい。

問題1 古典的規範として設定されていた科学像ないし科学者像が、20世紀を経て現代までに、どのように変化してきたのかに関して、筆者が述べるポイントを、400字程度でまとめなさい。なお、その際、筆者の用いている言葉を機械的に抽出・羅列するのではなく、変化の内実がよくわかるように述べること。

問題2 問題文の筆者が科学像の変化を批判的に捉えているのに対し、問題文の末尾には、事態の変化を現実的・積極的に捉え直す考え方も提示されている。あなたは、この点についてどう考えるか、もし問題点があるとすればどのように改善を図っていくかについて、問題文に即して掘り下げつつ、かつ具体例（例えば地球環境、戦争といった現実的な問題と科学とのかかわりや、研究の不正をめぐる問題）も交えて、800字以内で論じなさい。

問題文

金森修著「科学の危機」（集英社、2015年）より抜粋。なお、本文中の漢数字を一部、アラビア数字に変えた。

【お断り】

著作権の関係上、2頁以下の問題文については、ホームページ上での公開及び、印刷物での配布は行っていません。なお、閲覧のみ可能としていますので、ご希望の場合は、関西学院大学司法研究科事務室までお越しく下さい。

2016年度未修入試（B日程）論文問題のねらいと採点雑感

<本問題のねらい>

本問題は、解答時間120分以内に、かなりの量の文章を読んだうえで、ポイントを正確に掴んでそれを自分の言葉でわかりやすくまとめることや、筆者の問題提起を踏まえて受験生自身のつっこんだ考察を示すことなどが、求められています。題材として、金森修著「科学の危機」（集英社新書、2015年）という新しい論説を取り上げています。同書は、科学者が成果を期待する社会集団からの請負的な存在になっている状態を科学の変質であり危機であるにとらえ、科学者が公共性・公益性・自律性を取り戻すにはどうすればよいか、といった問題提起をしているものです。単なる読解力を試すだけではなく、現代社会の難しい問題について、論理的に、かつ一面的でなく現実も踏まえて掘り下げた考察ができるのかどうかを、試している出題です。

<問題1の解答例と解説>

（解答例）

古典的には、専門的知識を人々に役立てようと、私的利益を意に介さず、権力からも自律的に、ひたすら心理探究のために粉骨砕身する孤高の自由人という科学者像が強かった。しかし、20世紀前半に、集団的研究を不可欠とする領域の拡大に伴い、知的分業化された個々の研究者から研究計画の社会的効果が見えにくくなるという面や、大型の研究施設への国家による援助といった面が増えるようになった。20世紀後半以降にはこれらの点がさらに拡大し、研究活動の方向性が、科学者の学問的興味よりも研究資金を支出するための社会的判断を伴った科学政策によって決められる事態が増えた。このような変化に伴い、科学者たちの側から研究資金を獲得したり研究規制を緩和したりするための政治的働きかけを行ったり、逆に課題発注元に対して成果を挙げ説明責任を果たす必要が絶えず生じたりする状況が生じており、古典的規範として設定されていた科学者像の公益性、無私性、自律性が背景に退く様相を呈している。（420字）

（解説）

設問は、「古典的規範として設定されていた科学像ないし科学者像が、20世紀を経て現代までに、どのように変化してきたのかに関して」ポイントをまとめるように指定しています。かつその際に、「筆者の用いている言葉を機械的に抽出・羅列するのではなく、変化の内実がよくわかるように述べること。」と注文を付けています。

後者の注文は、問題文のポイントをまとめるように出題すると、素材となっている文章の中で中心的な命題が出てくる部分をそのまま抜き書きして、それを適当に羅列しただけで、本質的な部分を本当に消化してまとめているのか疑わしいような答案が出てくるので、そうではなく、自分なりに具体的な内容も本質的な部分もきっちり咀嚼したうえで、論旨がよく通っているわかりやすいまとめを求めるための注文です。かと言って、筆者の主張を勝手に言い換えて論旨を変えてしまうこともしてはならないことですので、答案を構成

する際には、筆者の表現、特にキーワードとなっている抽象語や形容詞はそのまま使用・抽出することとしたうえで、全体をどうまとめるのかを、よく考える必要があります。その際に、設問では科学像ないし科学者像が「20世紀を経て現代までにどのように変化してきたのか」をまとめるのですから、どこかの時代だけを極端に長く描写することにならないように、バランスを考える必要がありますし、「変化」を示すわけですから、変化を示すような対比的な抽象語や形容詞が何なのかをよく見極めたうえで、それを文脈の中でよくわかるように使って説明することが肝要です。採点・評価はそのような視点で行っています。

このような能力は、長文の判例や法律論文を読んで、正確に理解するとともにエッセンスを抽出したうえで、他のケースに応用していくといった作業が求められる法律家には、大変重要な能力といえることができます。

内容的な要点を指摘しますと、第一に、古典的規範として設定されていた科学像・科学者像においては、普遍性、公益性、無私性、自律性、真理探究のための孤高の自由人といったあたりの内容が、現代における変容との対比で、不可欠な要素です。第二に、20世紀前半では、集団的研究、知的分業化による個々の研究者の視野の狭小化や、国家援助との関わりといった面が加わってきます。第三に、20世紀後半から現代にかけては、科学者の真理探究の学問的興味よりも研究資金や科学政策とのかかわりが増加していることや、そのこととの関連で、科学者からの政治的働きかけが多くなり、逆に発注元に対する成果・説明責任＝請負的・利益追求的關係が支配的になっていること、これらの結果として、古典的規範として設定されていた科学者像の公益性、無私性、自律性が後景に退く様相を呈していること、といった記述が必要になるでしょう。

答案の中では、以上の内容を正確にバランスよく書かれているものもある一方で、20世紀前半と20世紀後半がほとんど区別されていないもの（筆者はそこもかなり区別しています）、現代の状況についての記述が、科学政策とのかかわりが増えているといった一部の描写にとどまり、発注元への説明責任や請負的關係といった現代の顕著な特徴をきっちりとらえていないものも目立ちました。また、時代を経た「変化」が内実を伴ってよくわかるように書かれていないものもありました。これらの記述の差異が採点・評価の主な差異になったと言えるでしょう。

<問題2の解説>

設問は、「筆者が科学像の変化を批判的に捉えているのに対し、問題文の末尾には、事態の変化を現実的・積極的に捉え直す考え方も提示されている。」としたうえで、「あなたは、この点についてどう考えるか、もし問題点があるとすればどのように改善を図っていくか」について、「問題文に即して掘り下げつつ」かつ「具体例（例えば地球環境、戦争といった現実的な問題と科学とのかかわりや、研究の不正をめぐる問題）も交えて」論じること、という注文を付けています。答案を構成するうえでは、まずこの注文を注意深く読んで、これに答えることが肝要です。

まず、筆者の提示した2つの方向の考え方に即して掘り下げることが必要ですので、この2つの考え方がどう対比され、後者の考え方は前者に対してどのようなアンチテーゼを示すものであるのかを、正確に掴む必要がありますし、答案の中でもその点に言及してほしいところです。

すなわち、「科学像の変化を批判的に捉えている考え方」とは、問題1でまとめたところの、現代における発注元（国家や企業）と請負集団（科学者集団）という関係の中で、科学者集団が生み出す成果や科学的知識には、本当に人々に役立つ普遍性や公益性を伴う保証がないのではないか、という点を批判的に捉える見方です。これに対して、「事態の変化を現実的・積極的に捉え直す考え方」というのは、このような知的生産方式を単に悪いと批判するのではなく、科学者から普遍性・公益性を求める志向が一切失われたわけではないし、何よりも先進的な成果が次々と生み出される現実的な可能性に注目し、生み出された成果が一般社会に流通すれば時空間の差異や関係者の利益を超えた普遍性や公益性をもつ可能性があることを、積極的に、言わば楽天的に捉えようとするスタンスに立っています。

したがって、本問では、このような、科学者の良心の予定調和を期待するような議論に対して、「あなたはどうか考えるか、もし問題点があるとすればどのように改善を図っていくか」を論じることを求めています。

一つの方向としては、そもそも科学が社会の需要と隔絶して真理探究のみを追い求めるというものではないことを率直に認め、国家や社会集団との金銭面も含めた関わりを持つなかで、外部から期待される成果に答えるという目的志向的な探究をしていくスタンスを変えるのは非現実的であると考え、研究対象の設定や成果の社会的共有のあり方は、研究政策をつかさどる社会のリーダー層が公益的立場からバランスをとって行っていけばよいし、またそうするしか改善の途はない、というような考え方があり得ます。設問では、具体例も交えて論じることを求めていますから、例えば地球環境の問題を例にとれば、科学技術の発展に取り組む科学者の意欲を生かしつつも、国家や様々な社会集団が国境を超えて、地球環境の改善に役立つ成果を挙げる研究に資金を大きく投入し、その成果を絶えず検証するようなシステムを構築することが、現実的な方策である、というような論を展開することが考えられます。

もう一つの方向としては、科学像をめぐる事態の変化を積極的に捉えるなどと言っても、例えば戦争政策を進めることが公益であるとして科学がそれに奉仕するだけとなれば、取り返しのつかない結果をもたらすことにつながるし、目先の経済的発展に寄与するだけの科学技術を開発した結果が地球環境の破壊の危険性をもたらしているというような現実に対して、無力ではないか、といった批判もあり得ます。この立場からは、バランスをとった誘導をしていくといった安直な方策を考案するのではなく、成果を求める請負的な科学研究というあり方自体を根本的に問い直し、科学者自身が良心に従った真理探究を無私的に行うことを、無条件に支援していく社会システムを追求できないか、あるいはそのような科学者が科学政策のリーダーになれるようなシステムの構築ができないか、といったことを、例を交えながら論じていくこととなるでしょう。

難しいテーマであるだけに、どちらの方向からの答案もあり得ますが、大事なことは、いずれの考え方をとるにせよ、一本調子の決めつけた議論をするのではなく、常に逆の立

場からの批判があり得ることを意識したものである必要があります。また、具体例（例えば地球環境、戦争といった現実的な問題と科学とのかかわりや、研究の不正をめぐる問題）も交えて書くことを要求していますから、具体例が論述にあたって適切に挙げられて中味を伴った議論がなされているかも、説得力につながる重要な要素です。

答案の中では、これらの要素をよく備えたものもありましたが、科学像の変化を批判的に見る方向の答案の中には、問題文の筆者の論をなぞるような記述に大半を費やしたようなものもありました。これはもとより問題1の続きを書いているようなものであり、設問に答えたことになりません。逆に事態を積極的・現実的に捉える立場からの答案の中には、筆者の考え方を批判するだけで通り一遍の記述をしているだけのものも見受けられました。特に、いずれの立場においても、具体例を掘り下げて説得的に論じた答案が少なかったように思われます。

最後に、本問のような設問は、その場で表面的に記述をまとめるといったことだけでは、説得的な論述になりません。平素から、国際問題、政治問題、社会的問題に常に興味関心を持ち、論争的なテーマに自分なりに考える視点をもっているかどうか、答案にも表れると言ってよいでしょう。法律家になるにあたっては、このような素養を身につけることが重要であることをいつも意識してほしいと思います。